

積文の訂正と追加（一一）

京都・平安京跡右京六条三坊（第二四号） （へいあんきょう）

- 1 所在地 京都市右京区西院追分町
- 2 調査期間 二〇〇〇年（平12）十一月～二〇〇一年一〇月
- 3 発掘機関 （財）古代学協会・古代学研究所
- 4 調査担当者 堀内明博・坂本範基
- 5 遺跡の種類 都城跡
- 6 遺跡の年代 縄文時代～古墳時代・平安時代
- 7 木簡の積文・内容

この調査で出土した木簡一三点について、科学的保存処理後の再
 積読を実施したところ、そのうちの六点について、積文や理解を改
 めるべき部分があることがわかったため、報告する。

池状落ち込み

- (1) ・「奈仁波都□佐久夜」
- ・「」
- 180×38×7 011 24 (2)

- (2) 「久過去」
- 189×(15.2)×6 081 24 (4)

- (3) □稻持刑部田須万呂替

- 葦人見
- 001 24 (5)

- (4) □□駅
- 001 24 (6)

- (5) ・「九々八十一八九七十二七九六十三 六九五十四」

- ・「五九卅五□」
- 247×27×5 011 24 (8)

(1)は、難波津の歌の習書がみられる木簡。上下両端と右辺は削り。
 左辺は文字が切れており、二次的削り。折敷状の板材を二次的に整
 形したものであろう。表面には他にも数種類の習書が重ね書きされ
 ているが、判読できない。(2)は上下両端削り。左右両辺割れ。二文
 字目は、残画からみて「邊」よりは「過」が妥当。(3)は、はつり屑
 状の削屑。左辺は木簡の原形を留めるか。一行目末尾の「替」は、

断定してこなかったが、読み切って差し支えない。二行目冒頭の文字は、「部」としてきたが、断定しにくい。末尾の「見」は、「月」と釈読してきたが、さらに残画があり、「見」と読むことができ、現に居るの意。人の管理に関わる木簡の削屑であろう。(4)は四片からなるが、右側の断片と、左上の断片は、接続にやや難がある。「駅」は断定してこなかったが、字形から見て、「駅」とみて間違いない。(5)は、九九が記された木簡。二片接続。上端と左右両辺は削り。下端は切断で、原形を保つ。裏面には上端の「五九卅五□」と重なる位置から中央部にかけて薄い墨痕が残る。木簡を二次的に加工している可能性があり、薄い墨痕は元の木簡に伴う文字か。

この他、本誌第二四号において、「○」や「×」の記号が書かれた木簡(3)として報告したものは、形態的には鳥形などの形代の可能性もある。また、今回の再調査の結果、表裏両面に同様の墨痕があることを確認した。このため、これらの墨痕は、文字や記号ではなく、形代の模様の可能性が高いとみられるので、木簡からは除外する。

なお、木簡の再釈読にあたっては、資料の現在の保管者である京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課のご高配をたまわった。釈読は、大阪市立大学の栄原永遠男氏と堀内が担当し、奈良文化財研究所史料研究室の渡辺晃宏・馬場基・山本崇・浅野啓介各氏のご教示を得た。また、撮影は同研究所の中村一郎氏による、

(堀内明博(京都府立大学))

